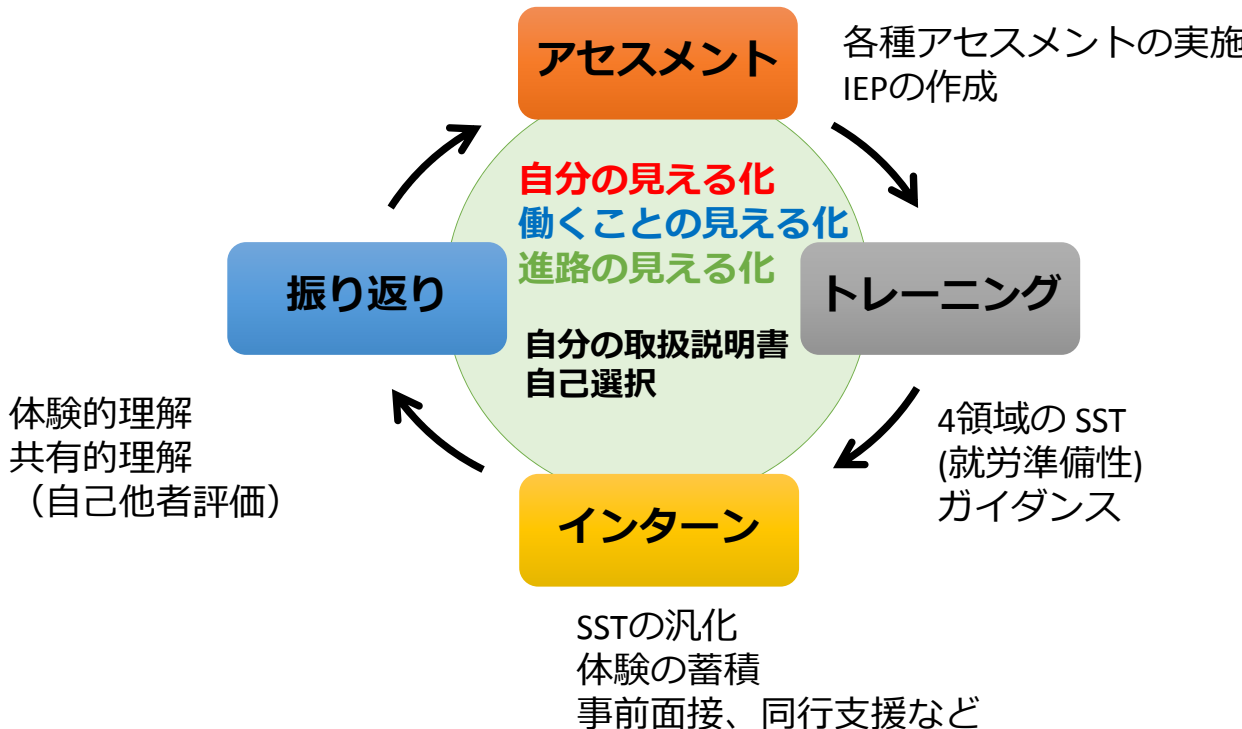


発達障がい学生に 対する社会移行支援

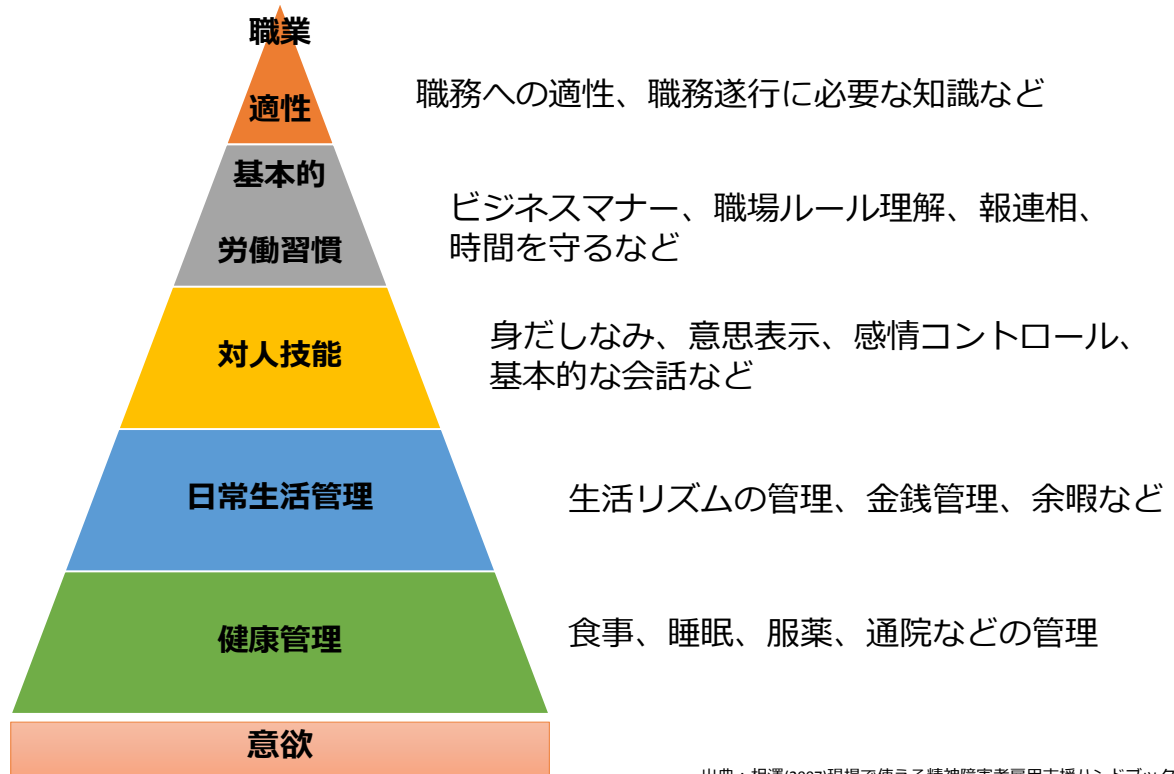
明星大学 ユニバーサルデザインセンター
臨床心理士 企業在籍型職場適応援助者
工藤陽介

STARTプログラム

自分で進路を決定するプロセスを支えることが目的

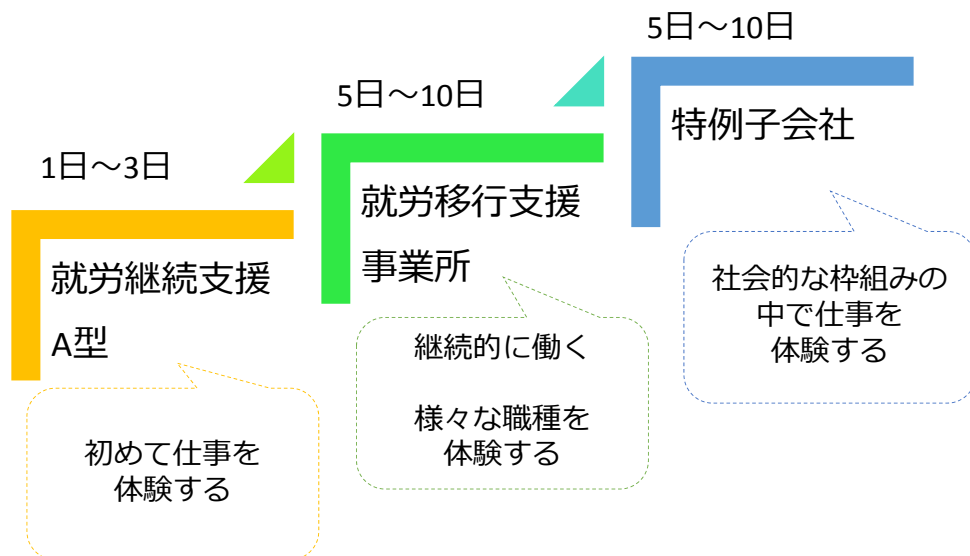


就労準備性(働くために必要な力)



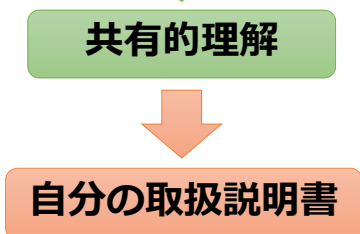
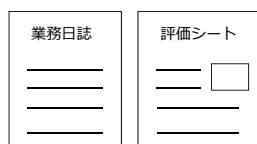
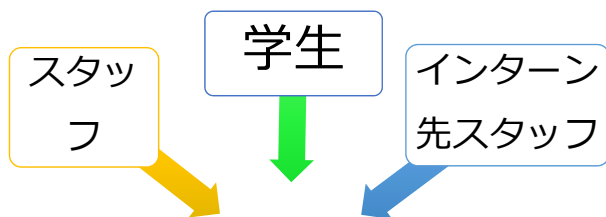
出典：相澤(2007)現場で使える精神障害者雇用支援ハンドブック

インターンシップ(体験場所の確保 = 体験的理解)



学生の状態に合わせてインターンシップ先を選定する。事前に評価項目の共有をし、実習中は体験の記録を行い、最終日に自己評価と他者評価を行う。

振り返り (自分のこと/働くことの見える化)



業務日誌や評価シートを元に、**具体的な事実**を共有し、振り返る。
自己評価と**他者評価**をすり合わせ、自己理解・仕事理解を深める。
課題の整理を行い、次期の目標設定を行う。

インターン(短期間実習)の限界

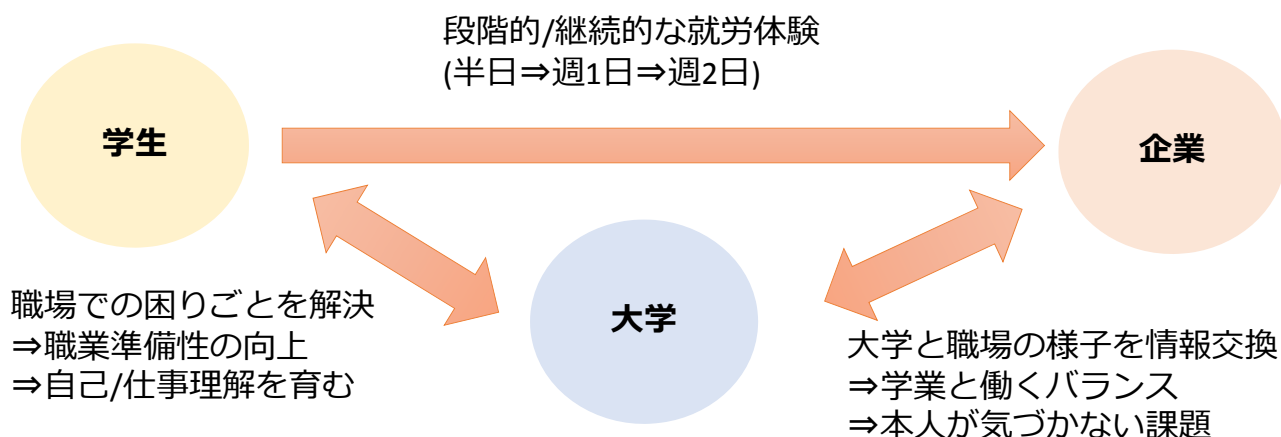
■ 過剰適応の課題

- ・ 短期間では課題が表面化しないことがある



■ 特例子会社でのアルバイト体験

- ・ 実際の現場で継続的に働く体験から自己理解/仕事理解を育む



事例

事例から見たこと

■ 働く体験の確保

-学内アルバイト、就労支援機関、企業など

■ 働くために必要な力/物差しの見える化

-働く時にどのような力が求められるのか理解

■ 体験の評価から自分を整理する

-自分の取扱説明書の作成⇒実際に練習

■ 進路の選択肢から自分で決定する

-整理した自分/仕事の特性を踏まえ、選択する

今後の発達障がい学生への 社会移行支援

■ 様々な角度から自分/仕事が見える化

- インターンシップ、アルバイト
- 学内(図書館、生協など)、特例子会社、一般企業

■ 多様な進路の見える化

- 障害者手帳を用いた就職活動ガイダンス
- 就職したOBの体験発表(ロールモデル獲得)
- 就労支援機関との連携による障害福祉サービスの理解
- 一般企業の障害者枠、特例子会社の合同企業説明会

■ 見える化を通じた折り合いを支えるための連携

- 現実を整理する役割と受け止める役割
- 学生相談室や障害学生支援室(担当)との連携